



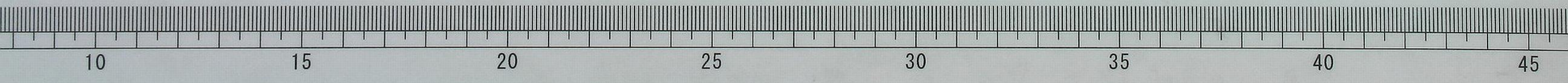
芳川俊雄 関
岡本勘造 終
櫻齋房 種画

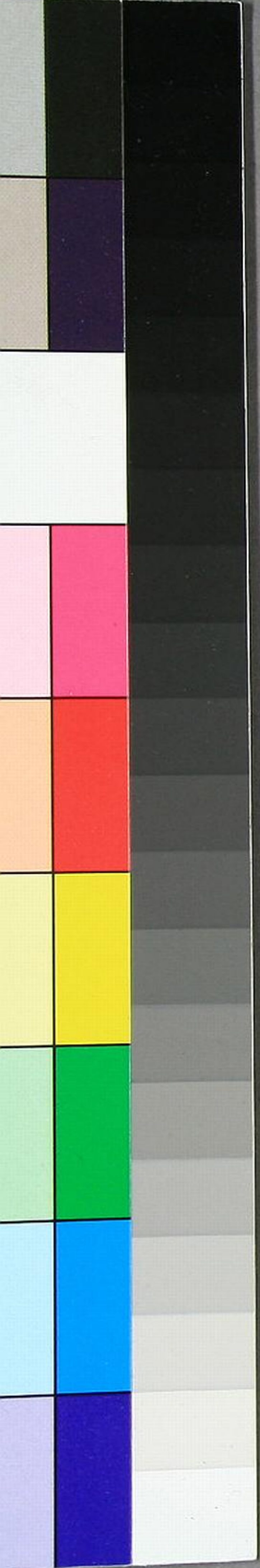
初編下

初編中

其名も高橋 東京奇聞
妻の侍

初編上





其名高橋
妻掃の小傳
東京奇聞

初編上



其名も高橋

毒婦小傳

東京奇聞

初編上之巻

芳川俊雄関

岡本勘造綴

櫻齋房種畫

島鮮堂壽梓



千里必究

不許翻刻

其名も高橋

毒婦の小傳

東京奇聞

式編

島鮮堂梓



芳川 俊権関

岡本勘造綴

櫻齋房種畫

島鮮堂梓





兼て悪事小其名も高橋放傳が履歷の既小府下の諸新聞にも委敷
 出で我東京新聞の第五百八号(本月一日)小其發端を掲げて漸く其
 成長を示し号を逐て今日も半小至らば此塩梅でいれひ續く有りと
 筆を横啣へはて考ぐてある所へ書肆島鮮堂の主人が來て謂く
 何卒ア、何れを本にして下さの隨分モ、儲うりませとおぼの
 至極暖たりの相談み成りど新聞紙の散逸しやすく連續したる傳
 紀の切々を讀つてなれい之を冊子に綴りたる所を挿繪を加へる
 るのよろ記者の丹誠も永く朽ざる様を留り其上幾許の暖くあると
 こ岡本子をおぼておん心漸々爰迄打をこころ甘いと辛みせたり
 夜延仕事の急拵へとうろ餘り沢山な味噌をつけぬ様よるこころの

明治十二年二月下旬

芳川俊雄誌



々々專刀二

原四要



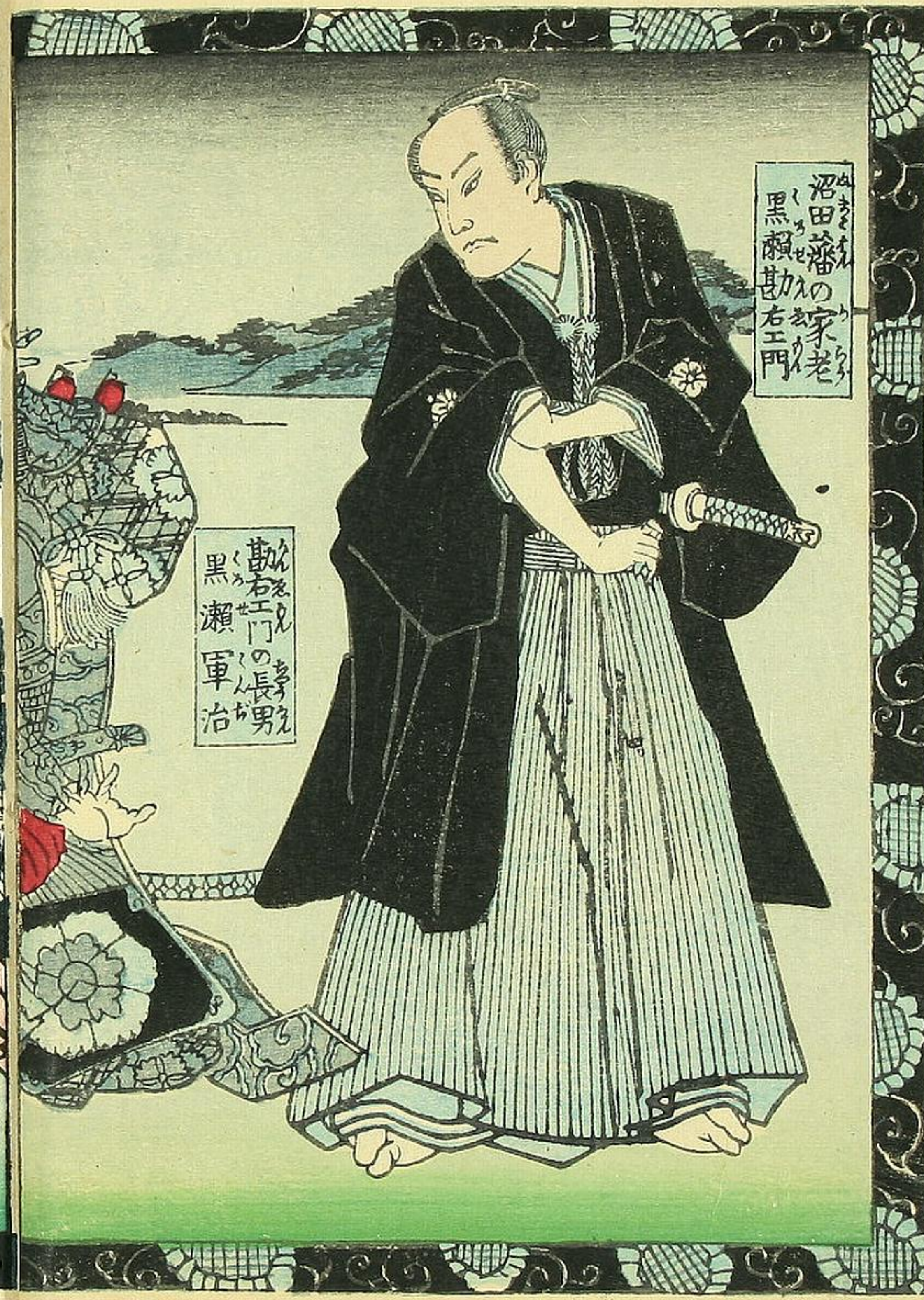
里
賴
勘
右
工
兩
妻
野



沼
田
藩
近
江
目
役
原
田
要



軍治の妹
伝



沼田藩の家老
黒瀬勘右門

勘右門の長男
黒瀬軍治



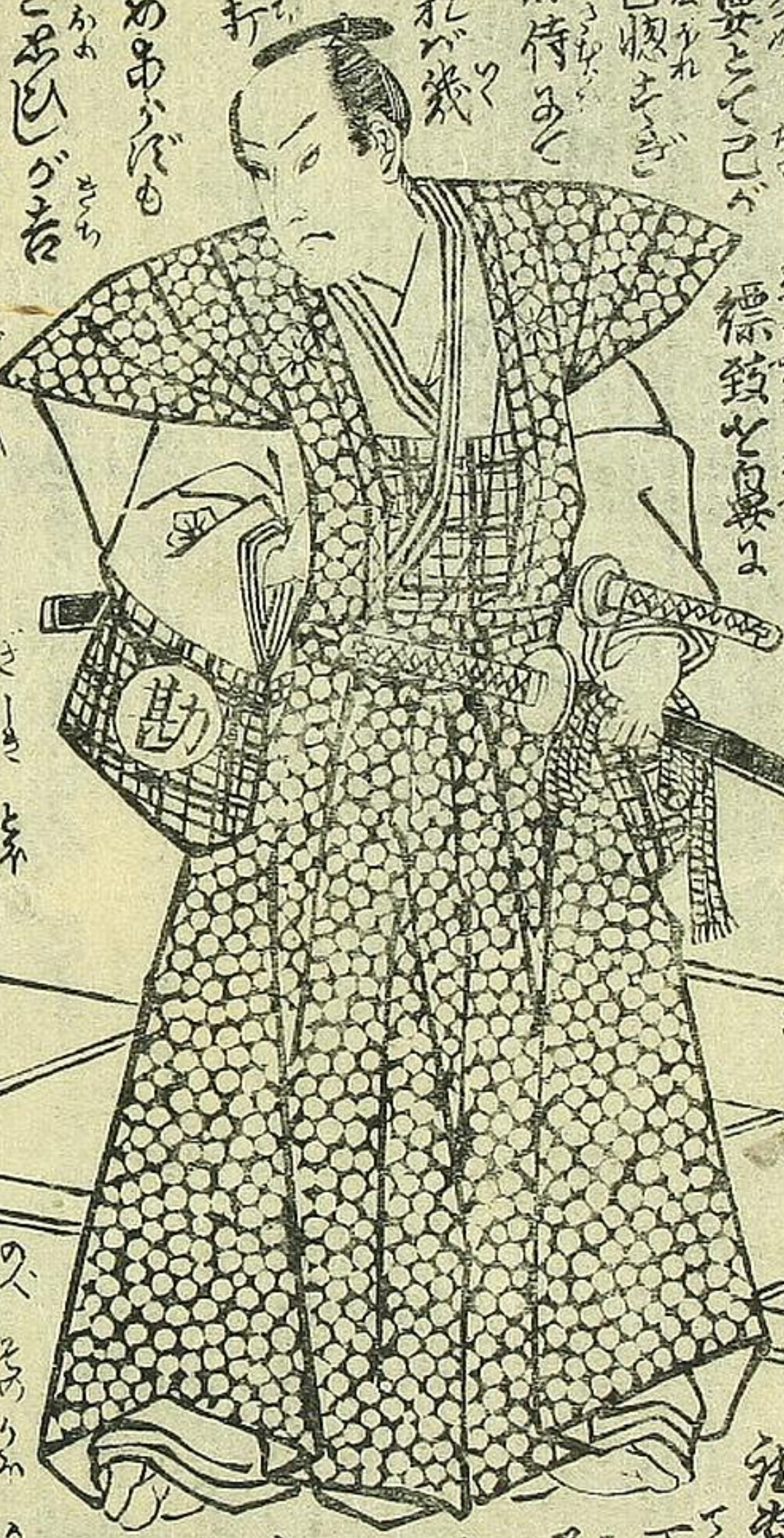
おんのかみ
高橋波之助

於傳の養良父
高橋九左門

發端 四方の民淫靡する徳川の政事に
 治する園八州の代由登る上孫の沼田中
 三万五千石を賦したる高橋波之助の名家
 老翁名波勘右衛門と云者あり孫高橋九左門
 と受領して文武の道あり勝つたばよく
 一藩の政事を任ずる人も高橋九左門
 一家の内由も二人とありとの事
 孫の夫人とわが高橋氏の果報者
 高橋九左門と又入るも高橋波之助の
 且の由祝儀の由は社と志
 高橋九左門の儀武の

改まる
 今春
 高橋九左門

つぎ供と役びて色味はるる後宅の
 ますしと入味は同流の近き役と初
 原田要とてこが 標致と自異は
 かひ己腹まき
 た着侍み
 有るれが幾
 眉と打
 ひそのあふげも
 かまとおひぐさ



例まれば是激うも後宅へ通を
 小女の方より互ひみそく再倍
 あひのりとも後い要まぬ今日

※後宅の風
 目小拭きか
 狂姿へ出さく
 丁寧あ
 吾れく
 あふくと
 まづの
 ましてト
 奉儀の
 祝儀と
 迷うと振と要いふら
 のどねまイヤお同虫の
 だんぶあ
 「先田や己が女付不二子



あしとわん流がわあまらわわわ
 持てのくイエ新
 お烟草を盛さる人
 ますしと幸とふと*

初見とふの
 不形縁の
 女小の
 そゆの
 舞やうとやれ
 ようて草中

つぎ 窓の外の勤王の旗をかきかき
 何とぞの末の旗より死そのまゝ
 承知をわきまアノまゝ人さしめ
 獄母の雨うの傍へまじり
 捕へては情状をうり
 きつておんごおめめ
 とぞと唱へて女お運び
 かく居その雛子と
 おめとせいと云
 と知る
 函の下女
 ひとくサア
 要換おめ

知はしく為る
 小あま
 不
 戴
 扱
 下女
 要
 小の



の横
 戴
 下
 の
 三
 二
 一
 何
 戴
 の
 横

○ 藤士の内でもおな

て親しく交る申され

後巻のあそ細

のそ三杯

厚とよ一偈よ

のそれ

面用と笑

とやと

あ

申せ

せ

へ

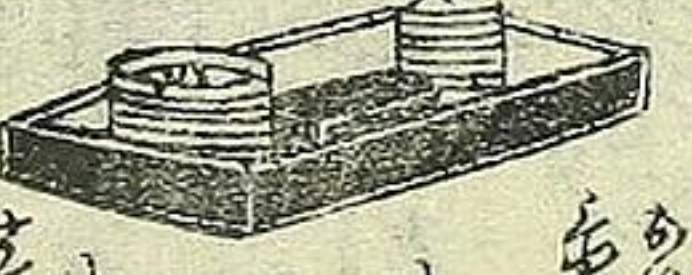
は



○ 今一献とを致すそのむと哉のハ
えんがらゆめどもささげの兼ての
るさる程可出入し人さ死因ハ彼也

とておからんご様さの草
まひけとのふと折不愛
て垢さしむ假ハ
まの委
款よそ

あてまの友と失ふは程
あまのふと折とおの移
るのとなく接投甘ゆ
あ



とて締らめも
とてあらう
とておふさびお
せ
あつと已惚すはこ
量入くらぬると送
か一車もあじが
は

人の目みからぬ板も厭せしるは後よりさくまうの
 狭面は今日もなまそ破に始り鬼やから挑む珍らさねと
 年の始めは穢ららつと入る態と愛慕あり板板をまよ
 暗い子幾時が寝ておしをさるへいひ出のるに放
 ちんんと飽まをくつるこじ煙も要いゆ
 ろく幾時が削へるまよ
 年ころくも女中
 子果のやうに
 つるそれと云出
 むのいひあはれまよ
 音ひ女中へ追羽板も着申
 ろくそあの膝を初めを尻又とあ
 借も事ぬるに一つ一す日はのちひを



とじてと幾時のもどろくまの横り
 かまき振舞ふ幾時のも今
 堪へもせもどろくひま
 あしで
 威候どつく
 うひなれで
 なる要どの
 先頭中より申
 さうとどひいせが
 む肉の改るある
 事のみあらんとその
 行よお枝あひの
 幸とらあひあふ



つぎあされるがまふし由かきし 今日の内原の機
 舞臺の人の戯れとけい かのうのりきんりどい
 かくお輝やまされよと流石の家老の内室より
 和らうまう強き笑えたるあふれて要い大お見とまが
 外は赤面を世を碎みまきし何と登もあつたるの
 年の始めのあきどめに大おかきし内原と
 又水日の暇をさへいひひきて逃がうか
 かくりたるま後へけり道
 突入もせは偶不事もあつと
 かりりやういれさるとまき
 まい裁世の窟
 うお生改むと
 きののまけ



○ 嘆きこれなる外
 元や木々のまきまに
 眺めまへ又珍らき
 山雲の夜
 どもまきま
 子規旅
 の宿り
 音づ
 不地帰
 の声の
 かくれ
 と長男の
 軍治が

○ 僅う株下とまこれ
 てのまきまかきし



○ 僅う株下とまこれ
 てのまきまかきし



東京區分繪圖全

鹿兒島紀事 六冊

命之養生善惡鏡全

獸類一覽加ふ

單語圖解全

粉色入小本數品

御所櫻梅松録 十齣

仇優忠臣藏折本

大功記銘々傳 四冊

新板双六類品々

龜地本問屋

深川區富岡門前町六十二番地
編輯人 岡本勘造
浅草區瓦町十二番地
出版人 網島龜吉

010190510676





東京新聞初編

中の巻

鳥解

文庫

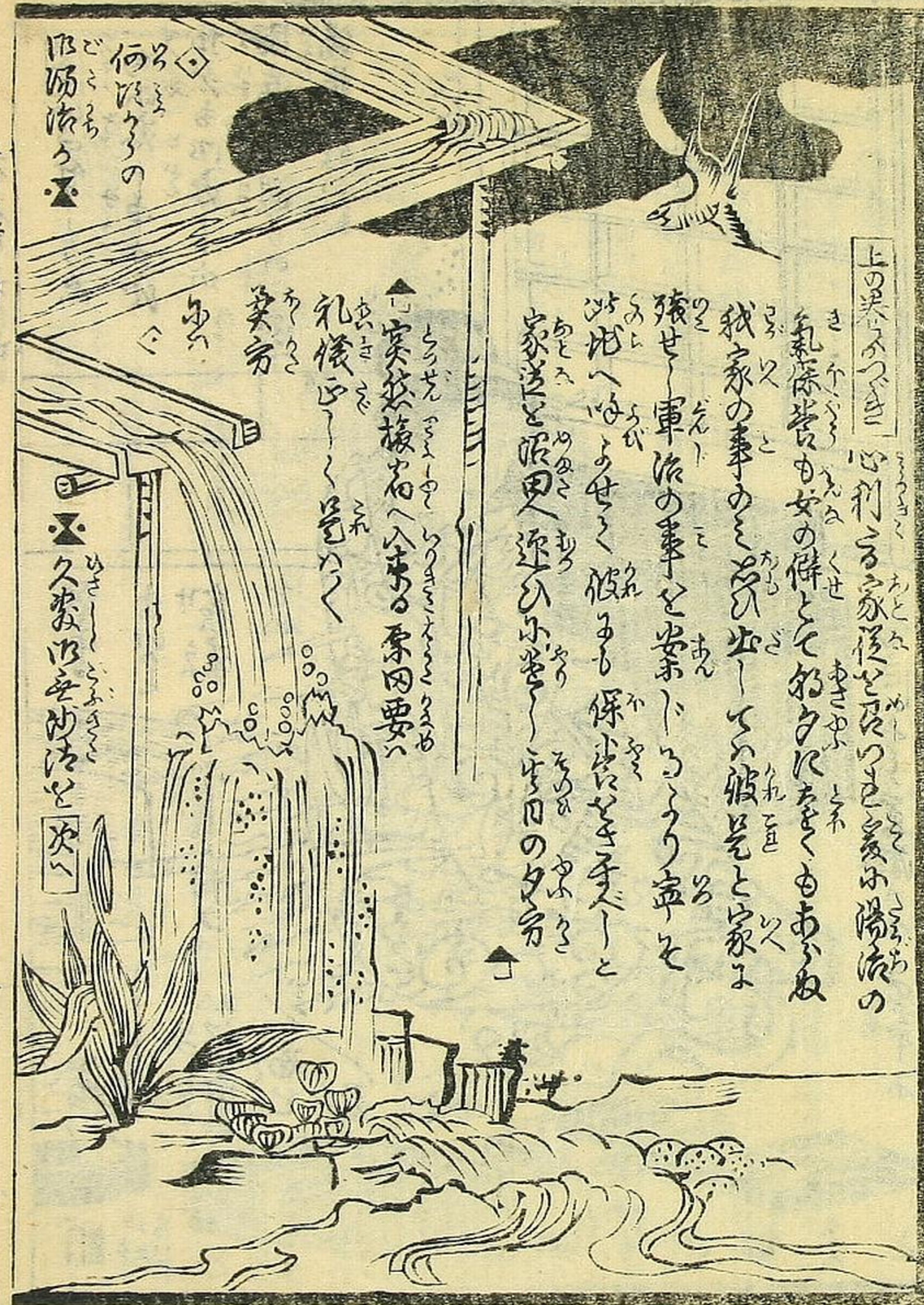


介の喜

芳川俊雄閣

園女勅造張

樓高所種画



上の果入つて

心利なる家後を以てはたさぬ陽流の

氣流菅も女の件とそおのりなきもあはぬ

我家の事のこゝろ出さぬ彼はと家よ

残せ軍治の事を安おとらうり事を

此地へはせく彼も保小をそそぐと

家送と浪更速ひ小をそそぐと夕方

▲実然様名へ入るる東田要ハ

礼儀正しく是れハ

美方

美方

◇何れも
何れも
何れも

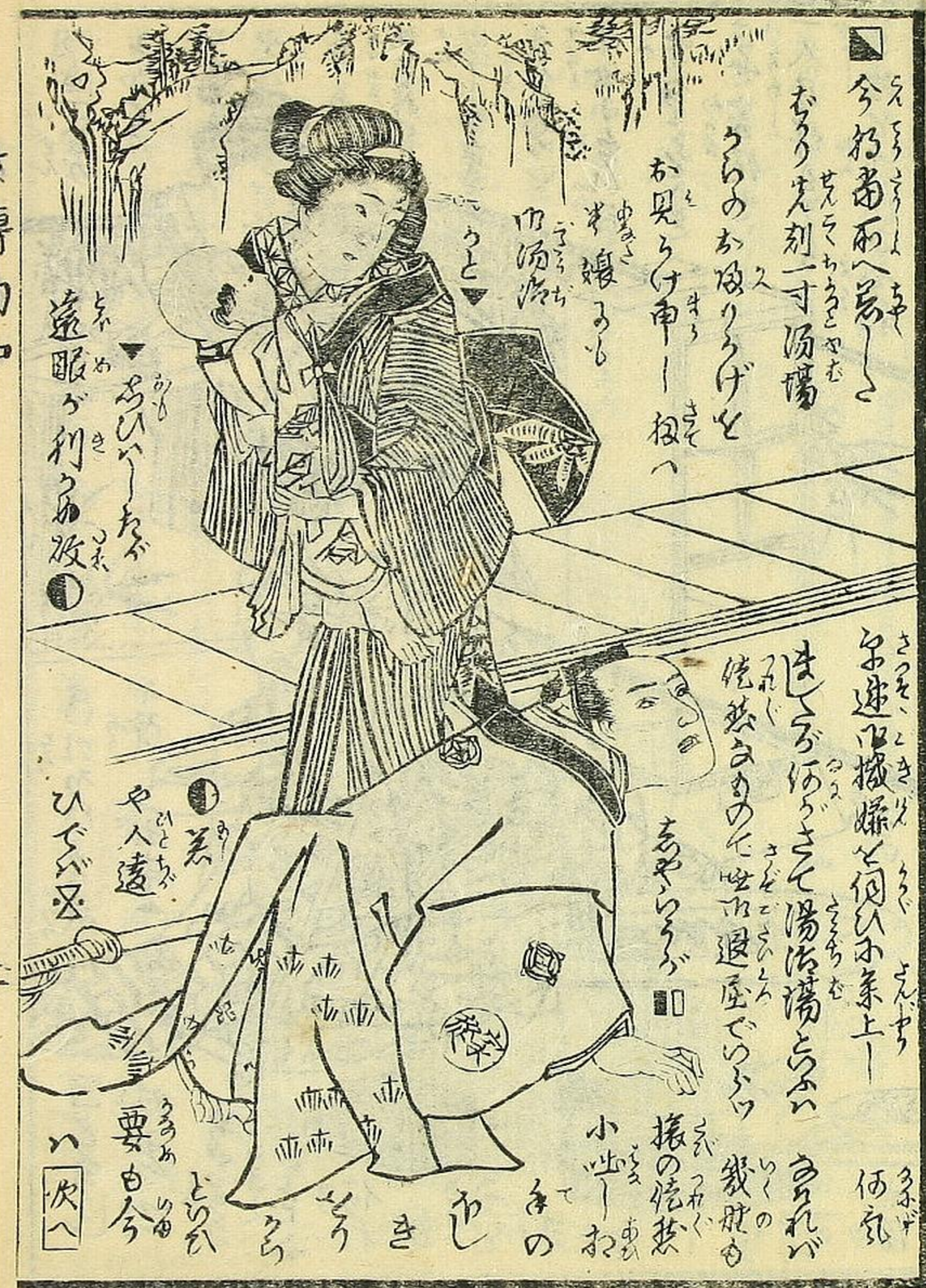
久米の無沙汰と云へ

入きりせしうき
一向小舟申さる
拙者申すおの
眼病二週りの
湯治と預ひ



◇ね みる

とる ぎで けり ち 中 女 ぐい へ ぶ と 借



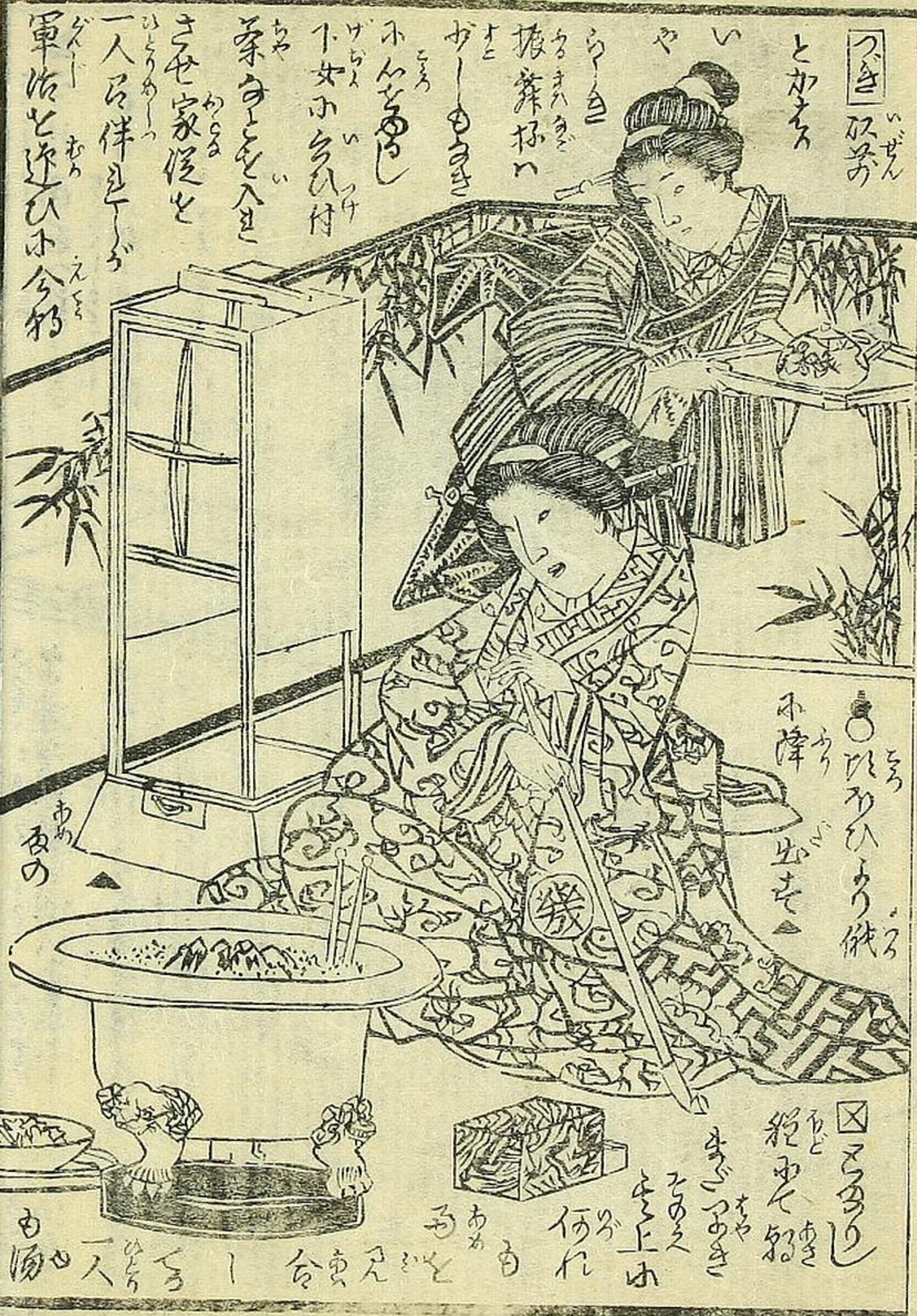
今ねあふへあふ
むろ先刻一寸湯場

うらめおぬりうげと
お見つけ申一ねへ

遠眼が利うあ放

何れが
幾れも
振の信
小吐お
の
き
し
の

要由今
ハ次へ



つぎ 双き
とがま

○以りひり俄
小降 出さ

×ささし
絶て知
まごつさ
ささし
ささし

や
らま
振舞
さーのま

小ん
下女
茶をい

一人
軍治と

酒田へ

あー車油
を流す

は
名

これがききあつて殊小淋しく
あふり圓ら辰もお国か
大さ小院慈と慰さぬと
世間をば小田別を
要いさ夜の五つはあが
縁高へ帰りしが兼てきよ
あるすあねぬると何と
再び幾種の振高を誘ひ
拙者の暇日暮したむらり
湯場の様子を知らされば素肉と
奉小幾種由丁度湯を小出さる折
輝返りさ大徳止る水固た



例由あればさう

六怪遇さん

やとあひま

さう四五回

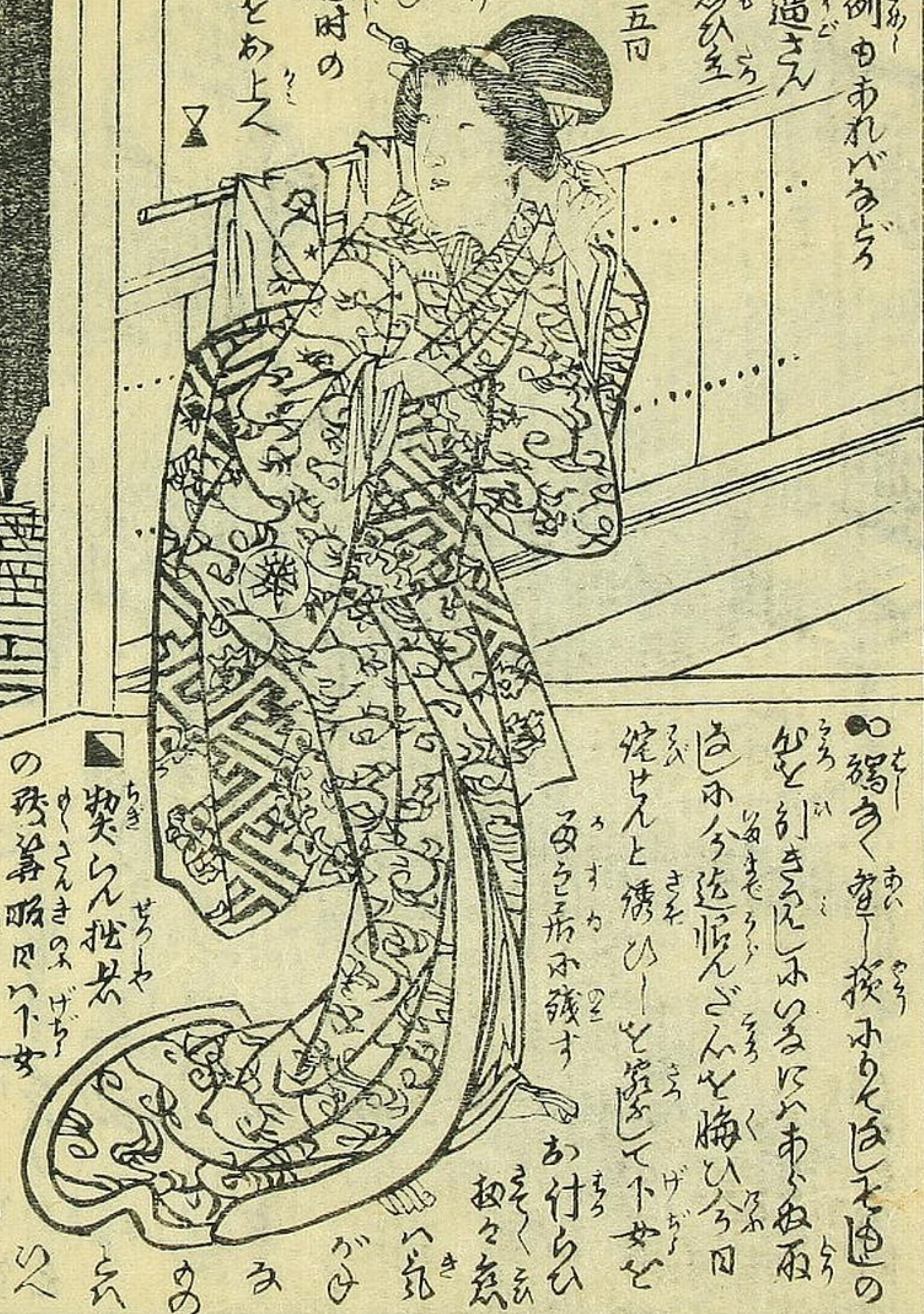
ま賑

病多

とやし

主将時の

お暇とあ上之



獨りて換ふれば七通の
知と引き返しふらむにわらぬ
はふ今迄恨んごんを悔ひ今日
控せんと誘ひて下せど
あすか
お付らぬ
あつた
いさ
か
あ
ま
あ
あ

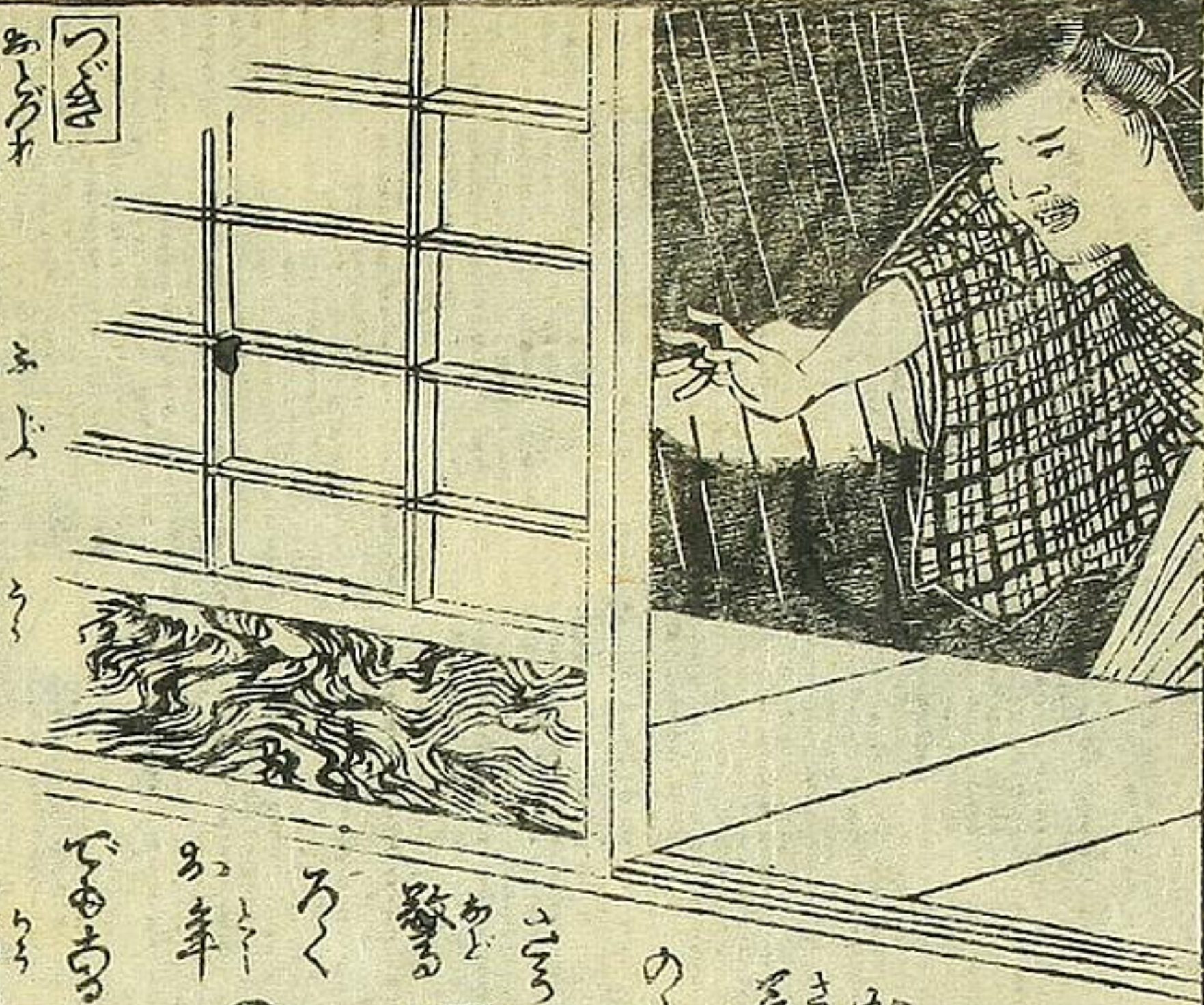
契らん世景
の秋暮暇に下女
が写る病一かたの
苦者する



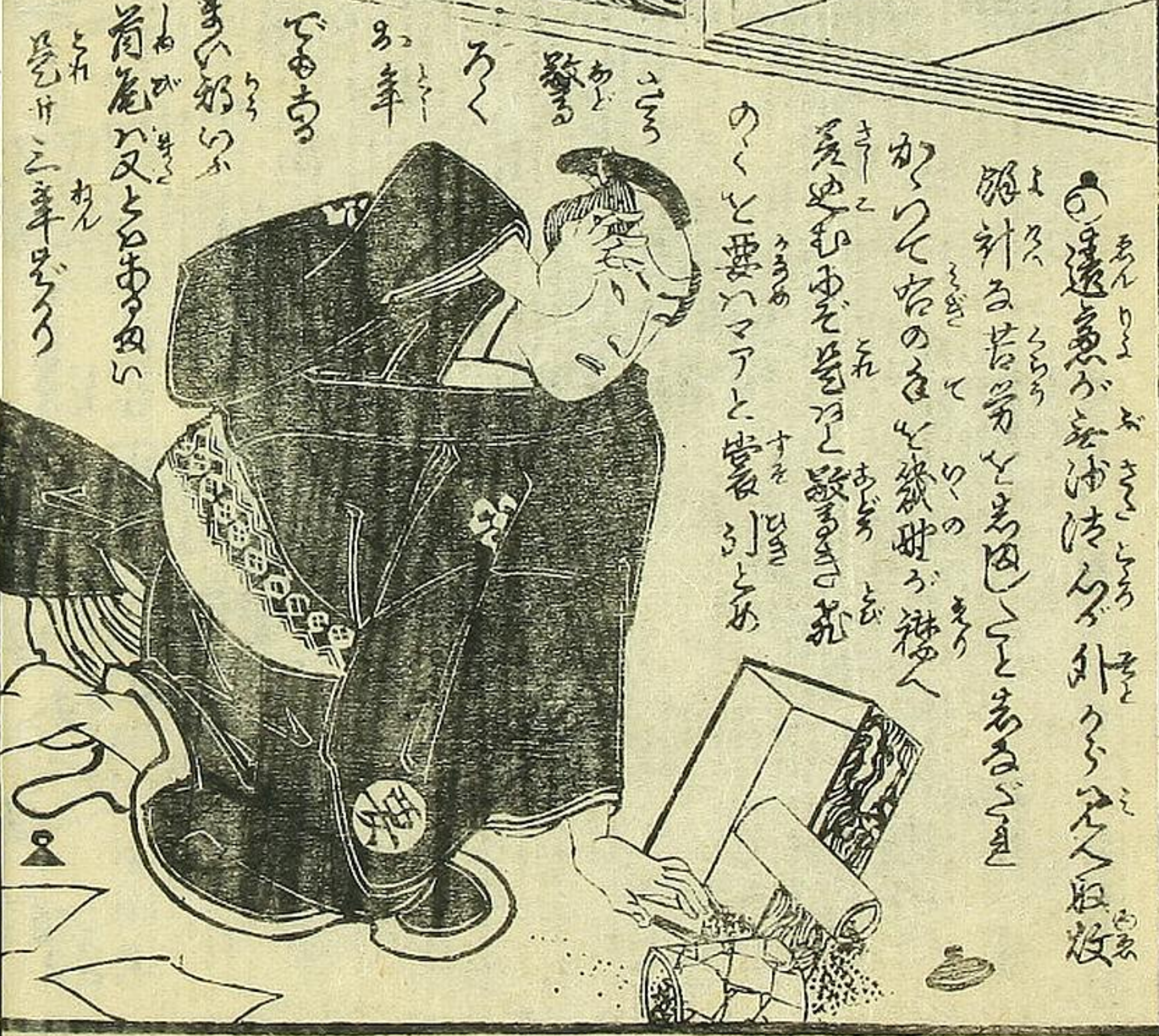
お暇とあ上之
主将時の
とやし
病多
ま賑
さう四五回
やとあひま
六怪遇さん
例由あればさう

あつた
いさ
か
あ
ま
あ
あ

の七通の
あつた
いさ
か
あ
ま
あ
あ



ついで
お侍の口
お侍の口
お侍の口



お侍の口
お侍の口
お侍の口
お侍の口



お侍の口
お侍の口
お侍の口
お侍の口



あかねがたへ
 のるべし
 優るは
 必すの
 必すの
 必すの

さねん
 退屈の
 退屈の
 退屈の



さねん
 退屈の
 退屈の
 退屈の

の人の
 退屈の
 退屈の
 退屈の

つぎ威して見んと声せ振り小助けてと叫ぶと
 喉に障むの板の底の小ほらにほたる小まきき
 外へかまくまき入るとかあき悲しく今もさ
 みるることと悔しきははに推指も夢を要い
 服と打れアツとのひさる海へ小制するとの波小
 幾度か意を起あがり不捨る
 奴とあつちのあつちのつひる
 折もよよ一人の病者か
 めと目してはしるさ
 望こるるおきる小要い
 致るる乳服とあき居るさつてイヤモ
 ひとあつちをイヤサふりてさる酒川の
 温泉の暖癒小まきとの事しやぐ成程

振きり小まきませう
 夜も昔し小助あつて
 一献入で互上ら
 と後あつて眼
 袖めか押へ
 方を根
 小まき
 つ面目
 ちびり



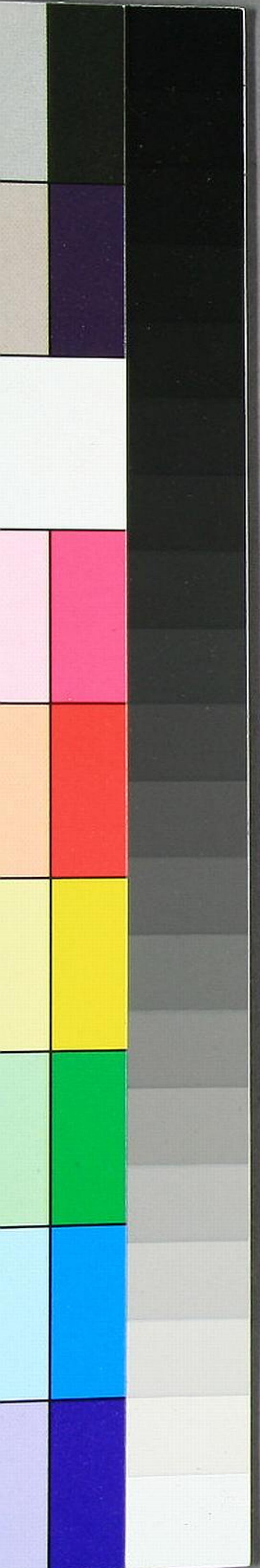
痛くきくはしと見ゆさあさる独者の痛も
 あひまう
 まい
 何二人で耳指も小振るをばしてあつて
 何を送りて幾度かボト海息をつくとあひまう
 ひさひ下鏡小生えて目とあ家老のお屋敷へ出入
 世が鏡の比自らのあ身さかへ入るこの
 徳紋も光も振ひかせぬの娘さう
 那もとりえあつちのさ中心に家老
 小まきりあつちのさ中心に家老
 小まきりあつちのさ中心に家老
 池原春さ夜の後妻と戯れ俄の六分の出せと差をばす因





芳川俊雄 関
岡本勘造 終
櫻齋房 種 画

初編下



於
ん

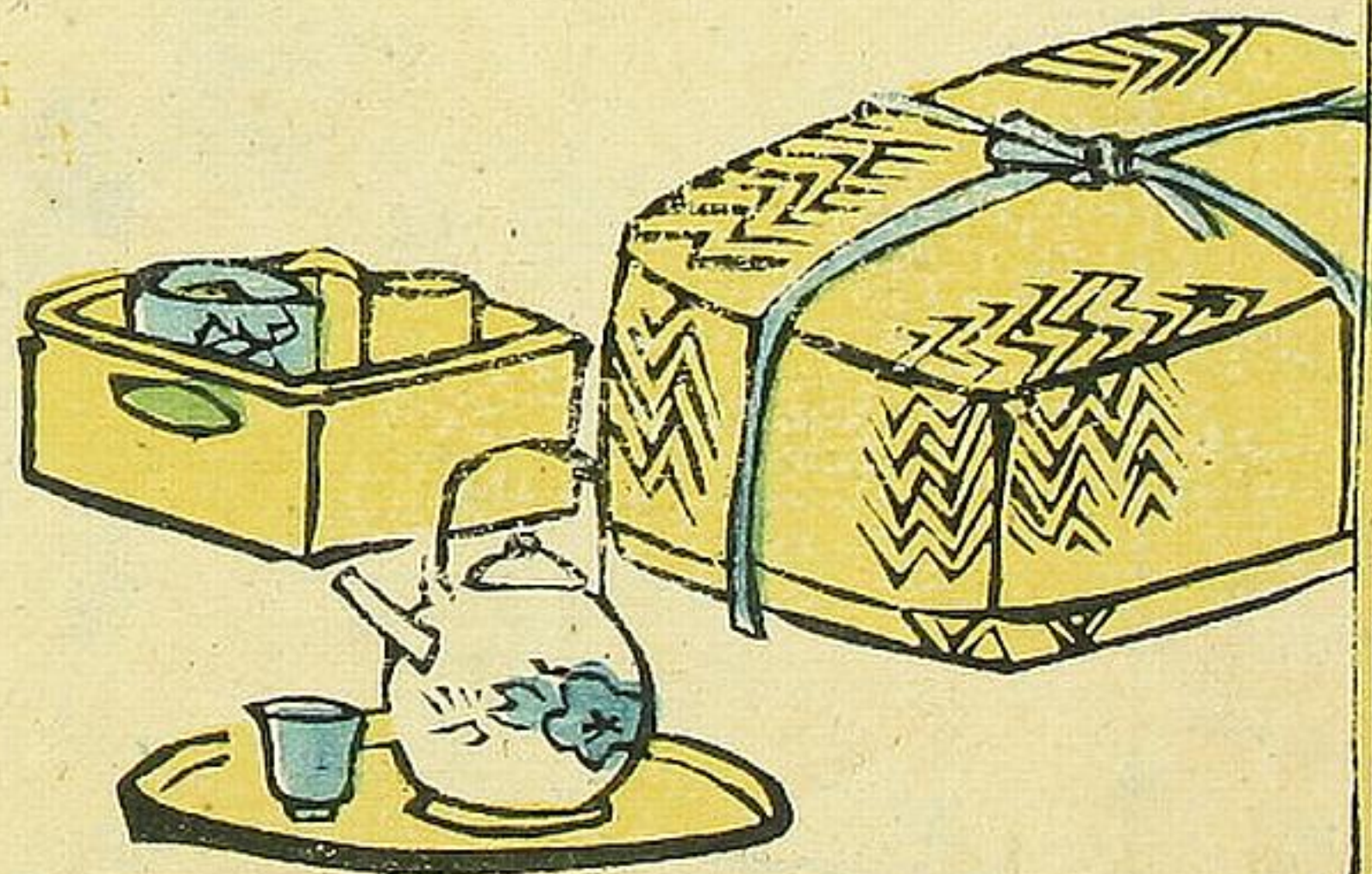
初
湯

下の巻

上
川
園

思
本
紙

一
府
終
志



け
ろ
紙

板



中の巻

写りのあま

あまのうらな

小降のひ

唐の容

まを

は

ひ

ま

控

族

○

廣く

細のあ

もふ

細のあ

もふ

細のあ

もふ

細のあ

もふ

細のあ

もふ

細のあ

もふ

於
専
切
下

放傳秘下

今日頃川へ出せし
先初後而て傍を過るが密に
以て借の煙一の通り發覺が
彼不ふあるとををて其
通せんかゝるあるらまや
是れと考へて其の發覺の
機と申せし由要と互ひ
小に合せ人き紀而て心あはる
首尾せんもの計畧の
將に奴まらるはと考へ
るは不
由せよ
今ま
物にホ

此のゆゑに
初る評判するうら
要と共小湯治坊へ發覺せし
瓜田の當ち多く為地へ以て
疑感とをうさる小あらずと
疑人の晴を
生むるまらひ
屢々さ
む風後
ゆやま
我所とらふ
鬼由南由
ひふ方事と

今日頃川へ出せし
先初後而て傍を過るが密に
以て借の煙一の通り發覺が
彼不ふあるとををて其
通せんかゝるあるらまや
是れと考へて其の發覺の
機と申せし由要と互ひ
小に合せ人き紀而て心あはる
首尾せんもの計畧の
將に奴まらるはと考へ
るは不
由せよ
今ま
物にホ

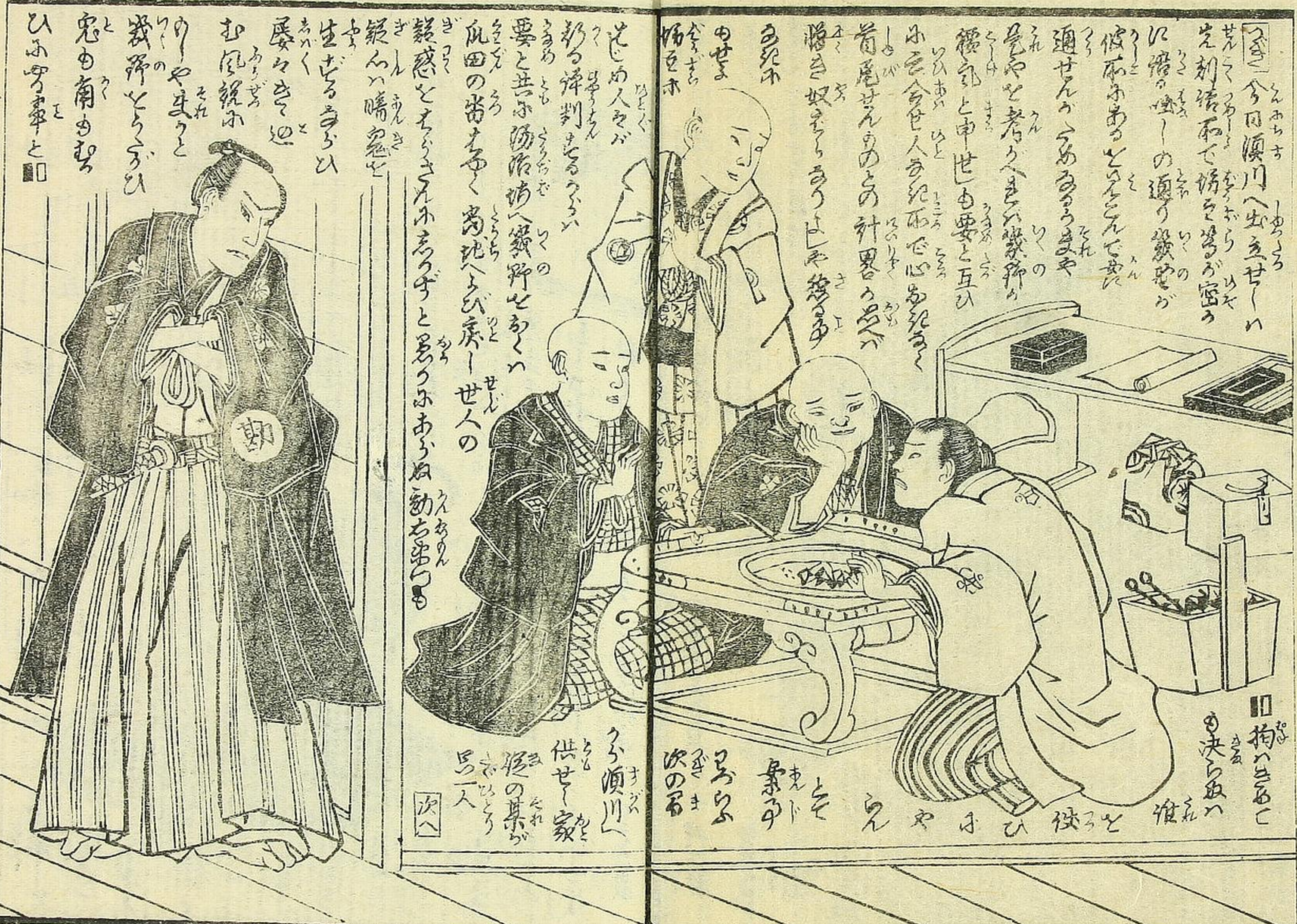
今日頃川へ出せし
先初後而て傍を過るが密に
以て借の煙一の通り發覺が
彼不ふあるとををて其
通せんかゝるあるらまや
是れと考へて其の發覺の
機と申せし由要と互ひ
小に合せ人き紀而て心あはる
首尾せんもの計畧の
將に奴まらるはと考へ
るは不
由せよ
今ま
物にホ

今日頃川へ出せし
先初後而て傍を過るが密に
以て借の煙一の通り發覺が
彼不ふあるとををて其
通せんかゝるあるらまや
是れと考へて其の發覺の
機と申せし由要と互ひ
小に合せ人き紀而て心あはる
首尾せんもの計畧の
將に奴まらるはと考へ
るは不
由せよ
今ま
物にホ

今日頃川へ出せし
先初後而て傍を過るが密に
以て借の煙一の通り發覺が
彼不ふあるとををて其
通せんかゝるあるらまや
是れと考へて其の發覺の
機と申せし由要と互ひ
小に合せ人き紀而て心あはる
首尾せんもの計畧の
將に奴まらるはと考へ
るは不
由せよ
今ま
物にホ

今日頃川へ出せし
先初後而て傍を過るが密に
以て借の煙一の通り發覺が
彼不ふあるとををて其
通せんかゝるあるらまや
是れと考へて其の發覺の
機と申せし由要と互ひ
小に合せ人き紀而て心あはる
首尾せんもの計畧の
將に奴まらるはと考へ
るは不
由せよ
今ま
物にホ

放傳秘下

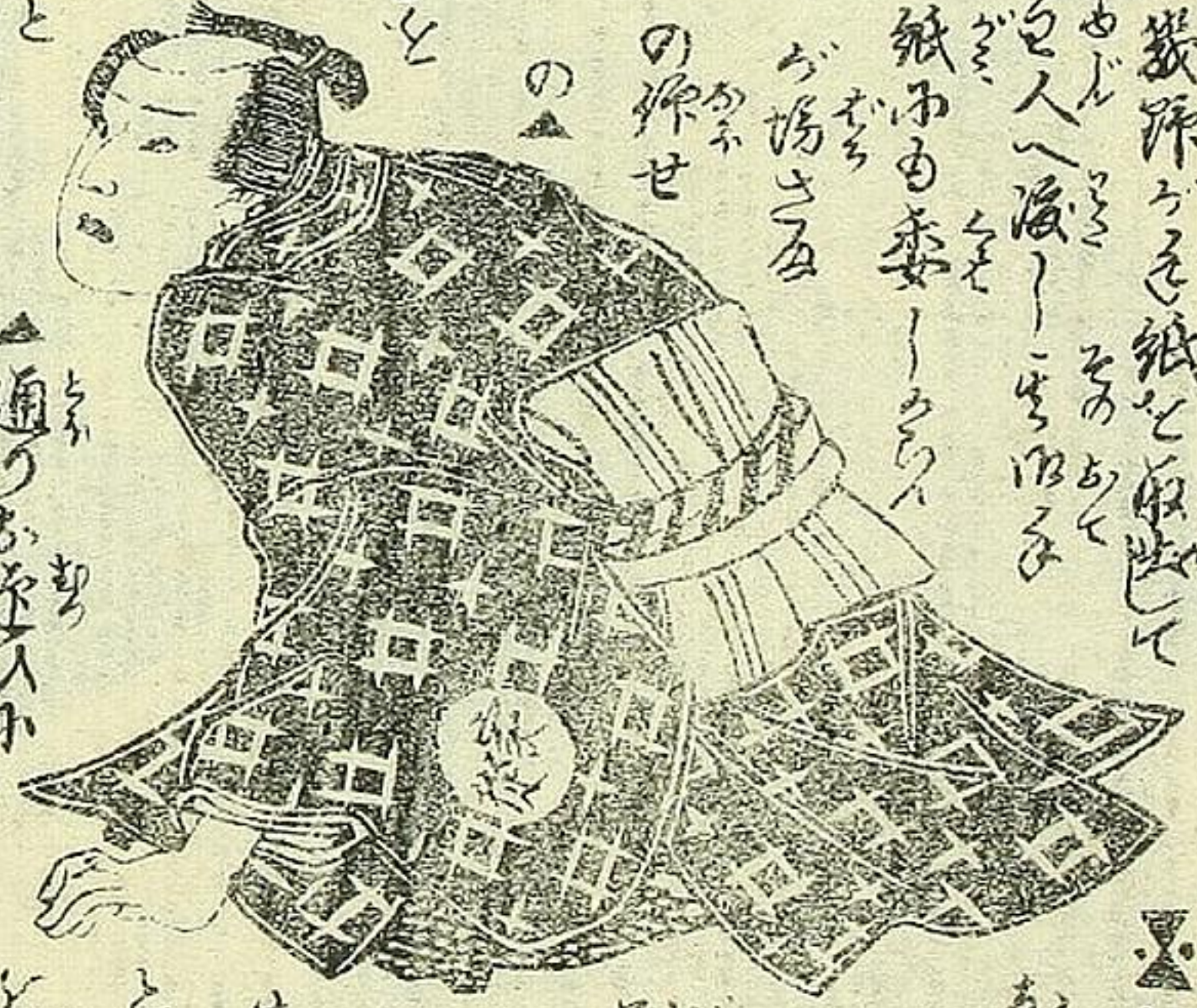


拘へ
決らぬ
推
と
ひ
使
小
や
え
と
集
る
次
の
石

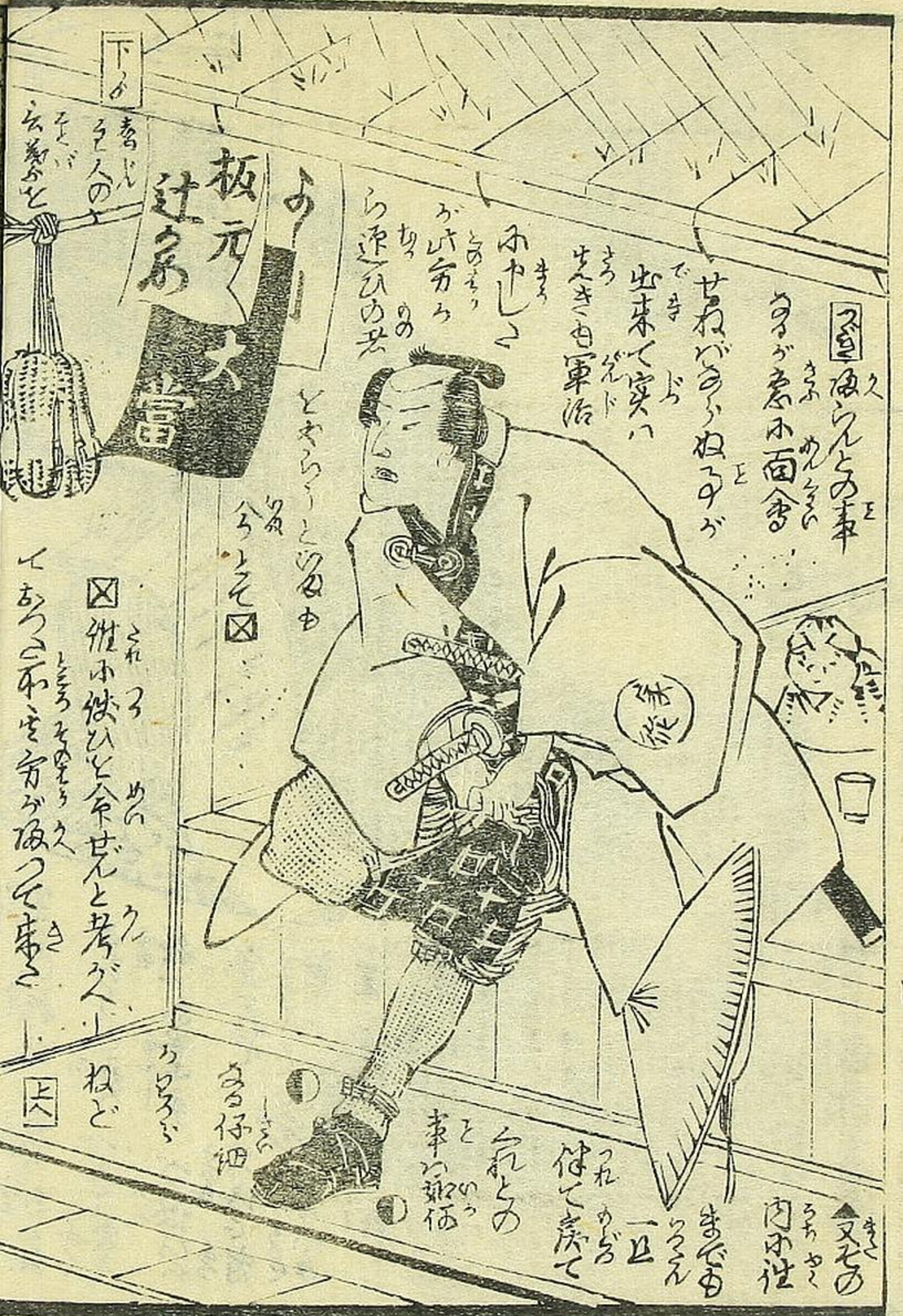
頃川へ
供せ
家
後
の
某
馬
一
人
次へ

つぎかへり来一とのやわが云々
 勘名申の仔細あれぬが物と云々
 早く是を全うの間も早く取返しの格の
 度後のまき度清の外へまきとて物と
 しようとする処へ軍法が慌て就まり
 お父様常が湯と涼ひ小来まりとの
 ぶらぶら酒酌へまきとやまのとなけは勇むと
 隠して家後とまき招きまきまき
 一人を降りし何事あるぞ度か父と

紙由委一
 紙由委一
 紙由委一
 紙由委一
 紙由委一
 紙由委一
 紙由委一
 紙由委一
 紙由委一
 紙由委一



定海初で
 あらうと突
 換が安味
 の供ひ
 大儀で育
 紙の
 換子
 一週りも遠く



又七の
内中世
まじり
つるん
一且
つれから
付てきて

せねいさぬるが
出末て突い
まき
まき
まき
まき

ふやし
かひ方
ら速ひめ

板元大當
辻系

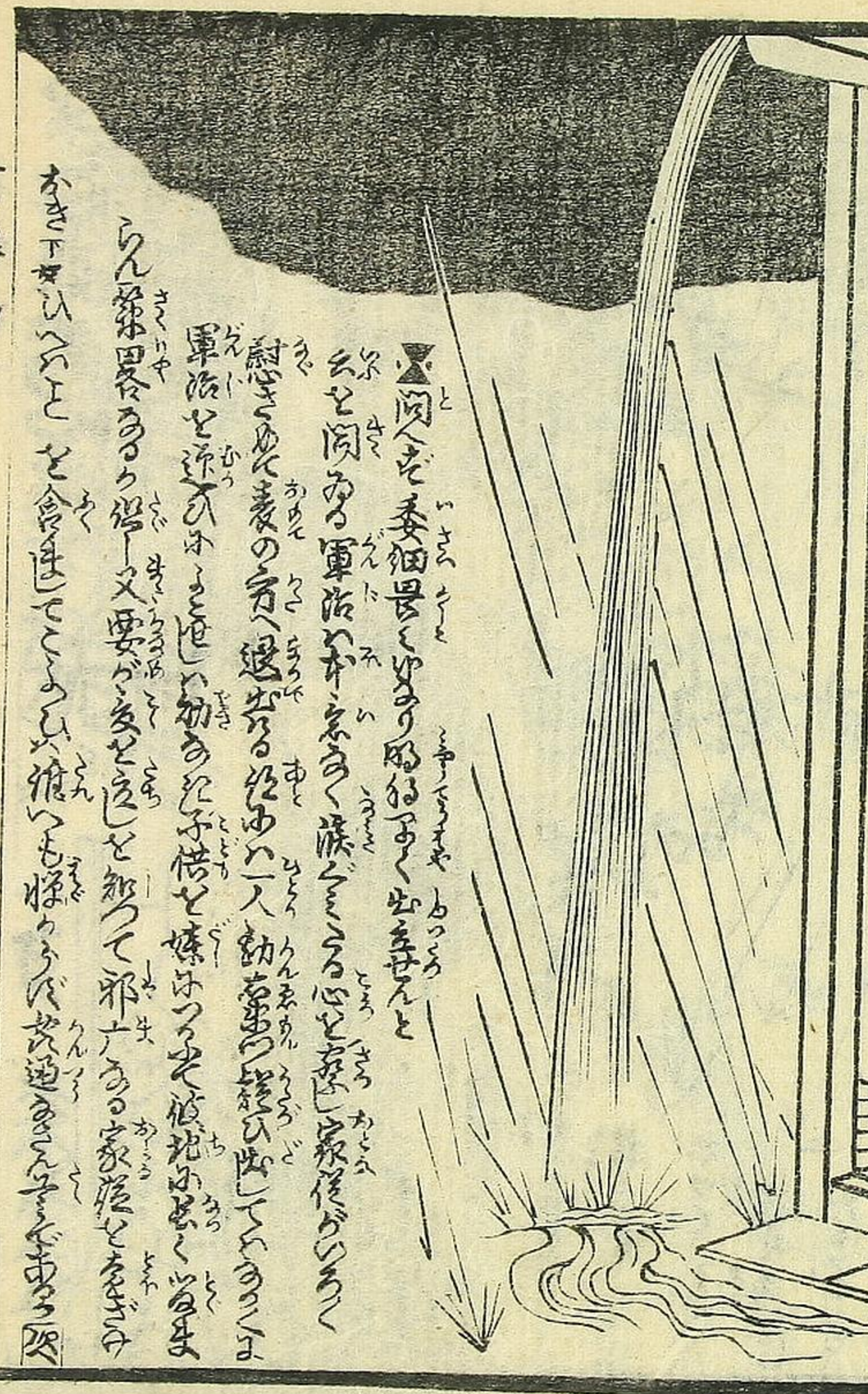
下の
香ん
そ人の
そい
云着と

箱 惟小使ひと令せんと考ぐ
てあつて本を方かぬつてま

ねと
る仔細
りつら

押も

のいまひ大後下あひのり日源月へあて返



六傳四

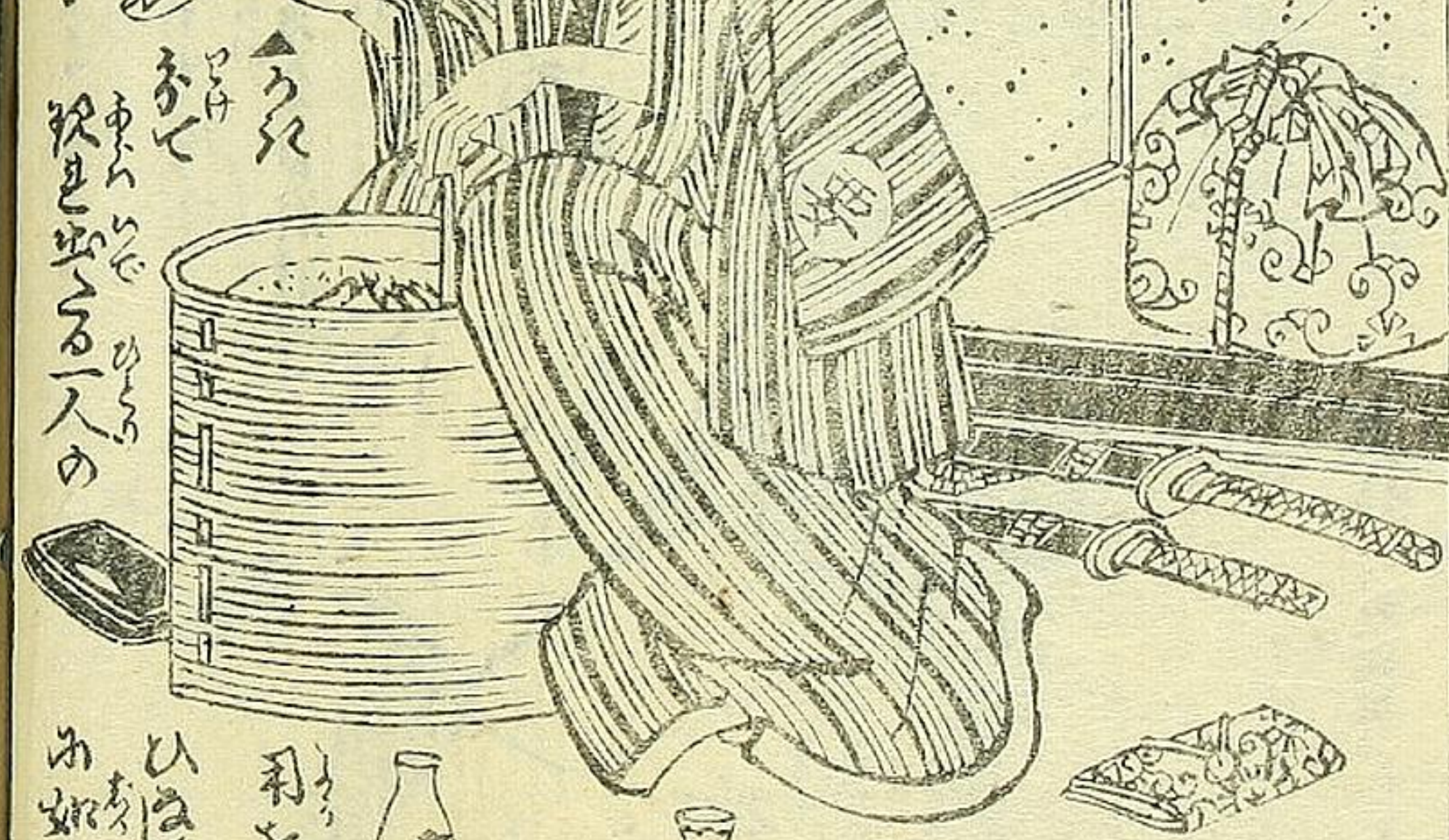
△関人を委細畏くゆりぬるゆへ出まんと
 △と関る軍治の本をさく藤くするはと
 謝とて表の方へ送るはあひ入勅書
 軍治と許しひかへし初めは子供と妹はつた
 らん弟思ふるは又要がまをばを知りて邪
 大さ下まひいしとを念はしむるは
 大さ下まひいしとを念はしむるは

此繪解の
二編の分
れど看容
よろろく
察し久く

まなま
まなま
ぬのすし
くとすれど

■次の白ひ丸

小夏も遊むに
殊小暇の疲れも
出て山あらねど板路の上り
下りお息をきりふかきばおれ
休むひまの小隙のひまをうひに二丁

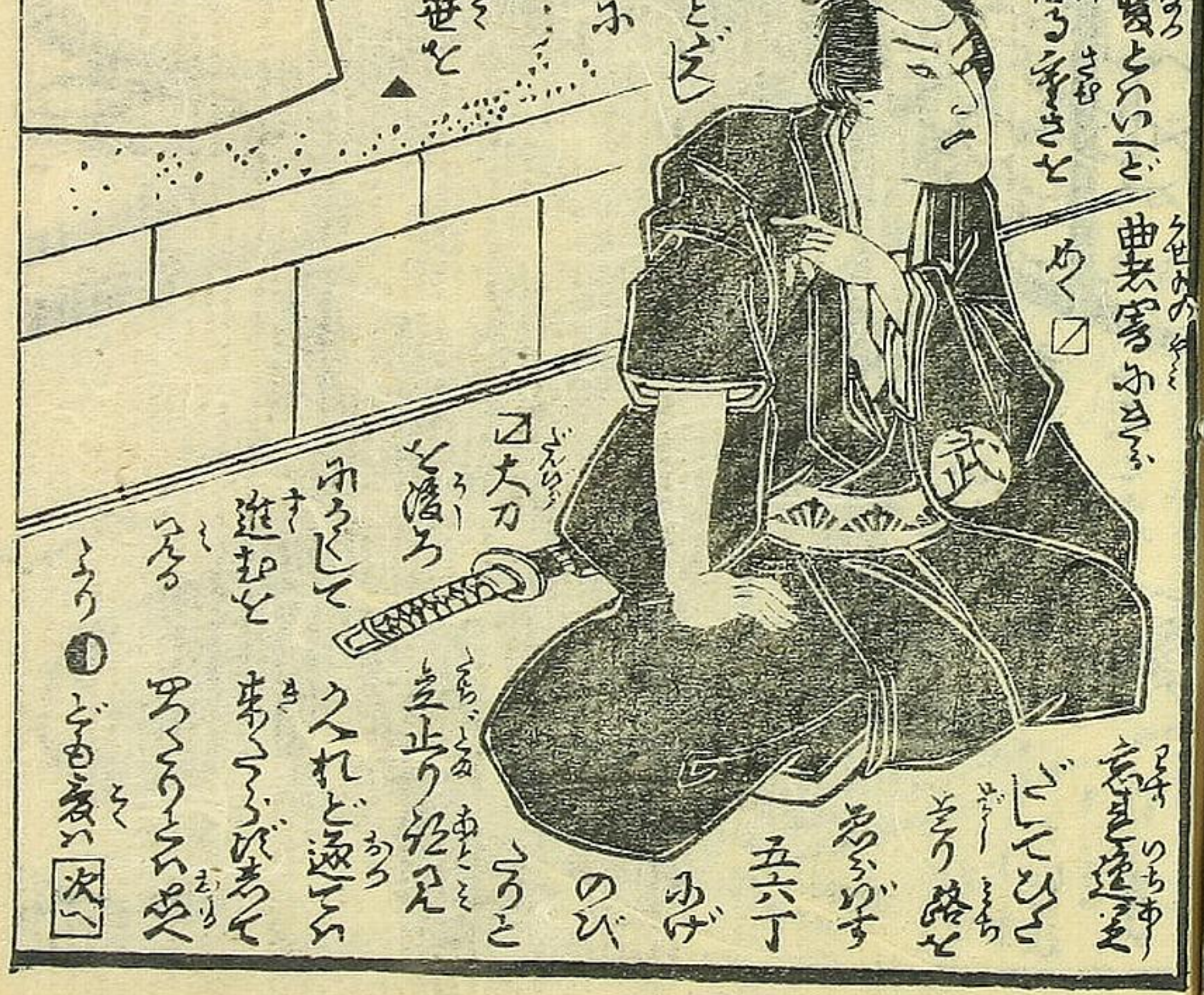


ひはて若きと雖も
お如くと疲れも

おの
おの
おの
おの
おの
おの
おの
おの

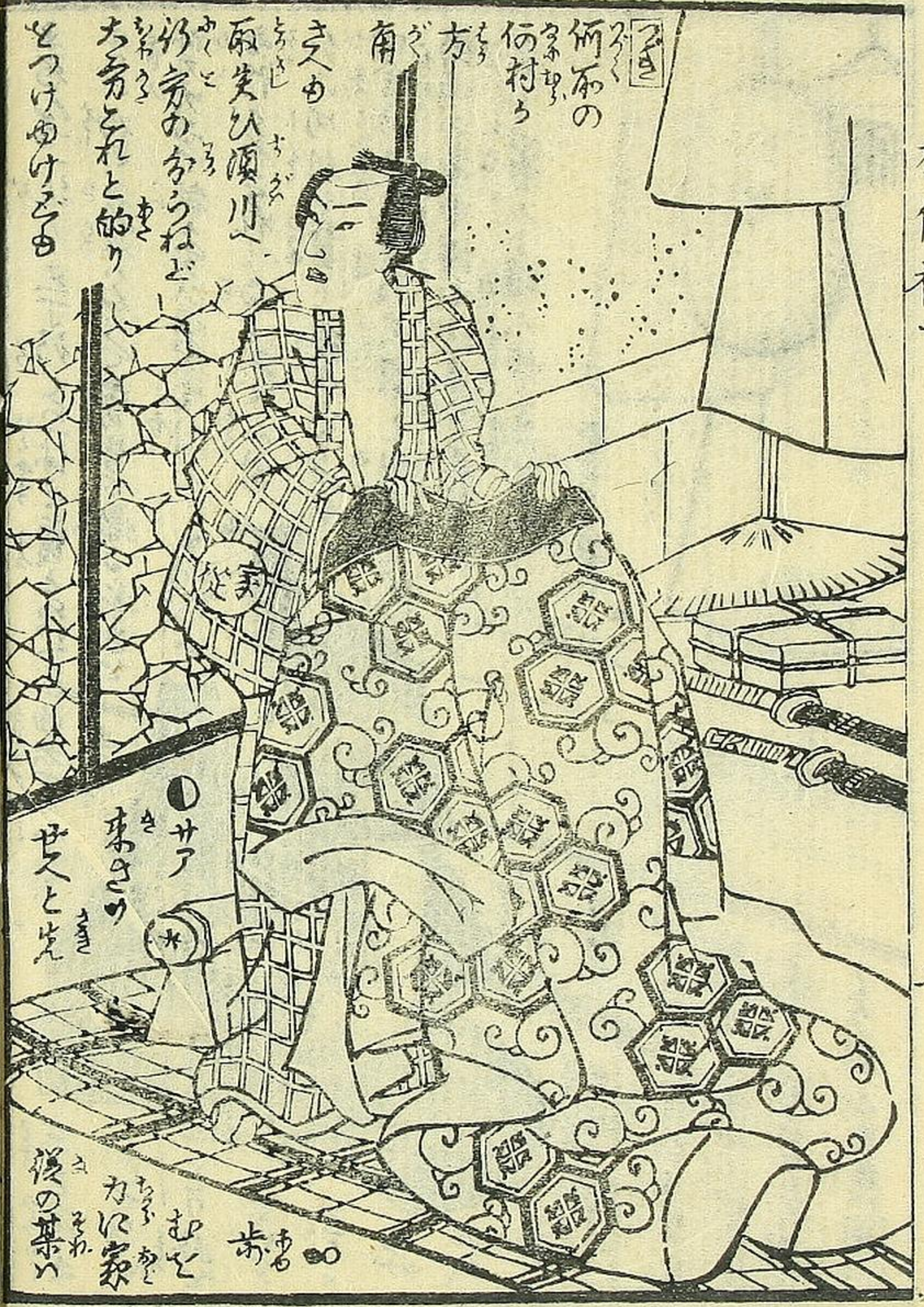
おの
おの
おの
おの
おの
おの
おの
おの

まもなく一振し二丁にて二休の夏といふと
まよ物の後置のぬれを膚はせ徹す事と
休火中で乾きさしやて
を靴とあされしあて
外小の朝と暮し一歩入りの
田舎のあまき止ぬきのやと往來と
路傍の度申塔や辻をとまごりふ
多急いせきりし接人伝と声と
察し小世と



曲を
む
五六丁
おの
おの
おの
おの

おの
おの
おの
おの
おの
おの
おの
おの

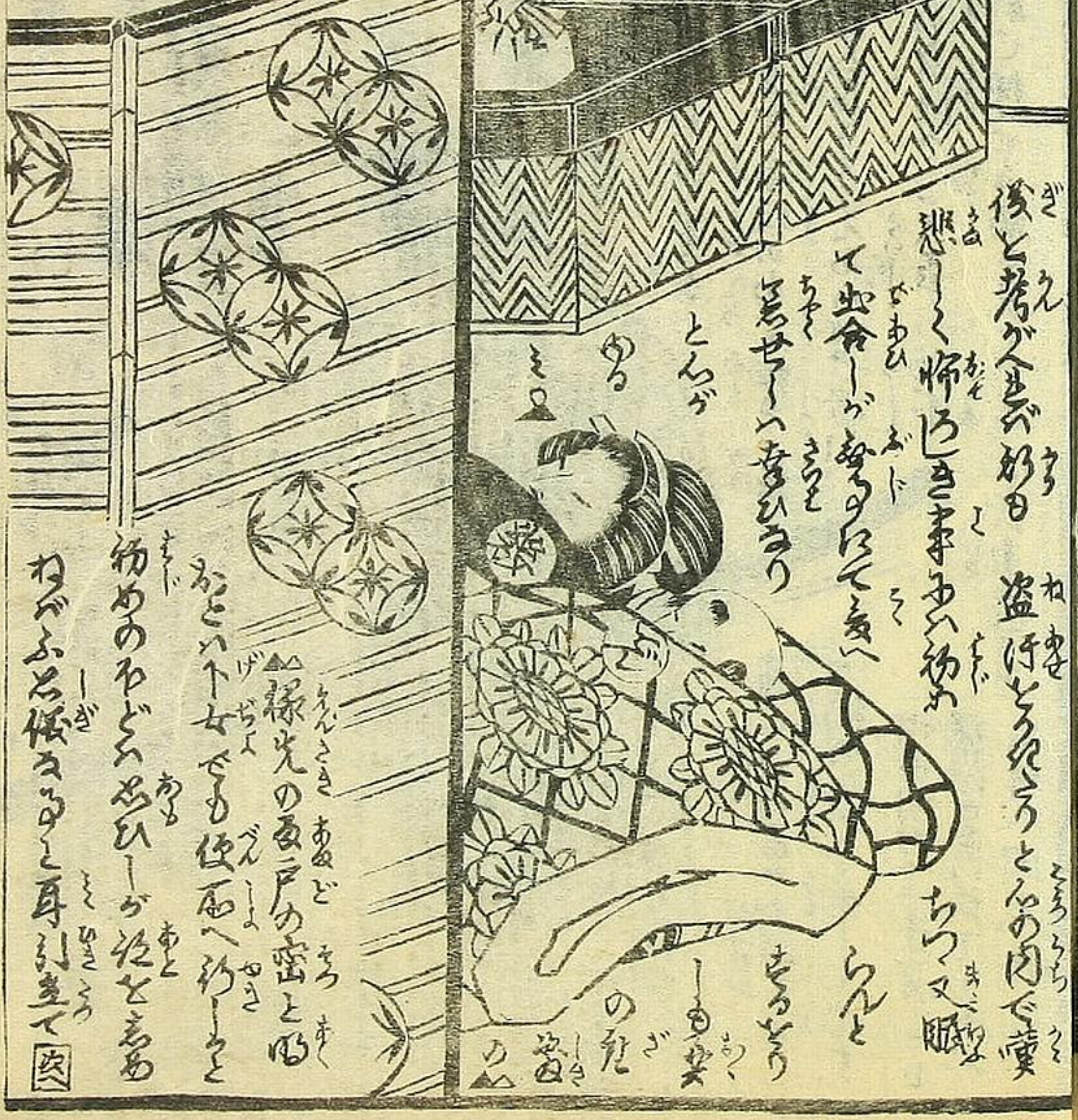


何所の何村
 南
 方
 さよ
 雨矢以瀬川
 仍方のかうねど
 大方とれと納り
 とつけぬけらも
 田舎菜畑
 の標の赤さ
 石の儀と
 足は履き
 かね路
 たまのひ
 途方
 向より
 村の
 むらへ
 度り
 まで
 より

箱ろ
 八丁
 後へ
 あり
 十八丁
 半座
 小使
 何
 と二人

城跡
 いなる
 徳守
 二人
 先
 いそ
 お母
 つね
 交て
 いよ
 て洗
 そと
 肉ツツ

明けもやく
 横殺せんと次の
 間の空盗へ立
 り入り隙の候
 と細目あけて
 控火と引き
 練のまなと
 加えに腹を
 戸柵の夜具と
 取あしを自ら
 布巾もろして
 静くふさぎあふ
 るの二人の姿と

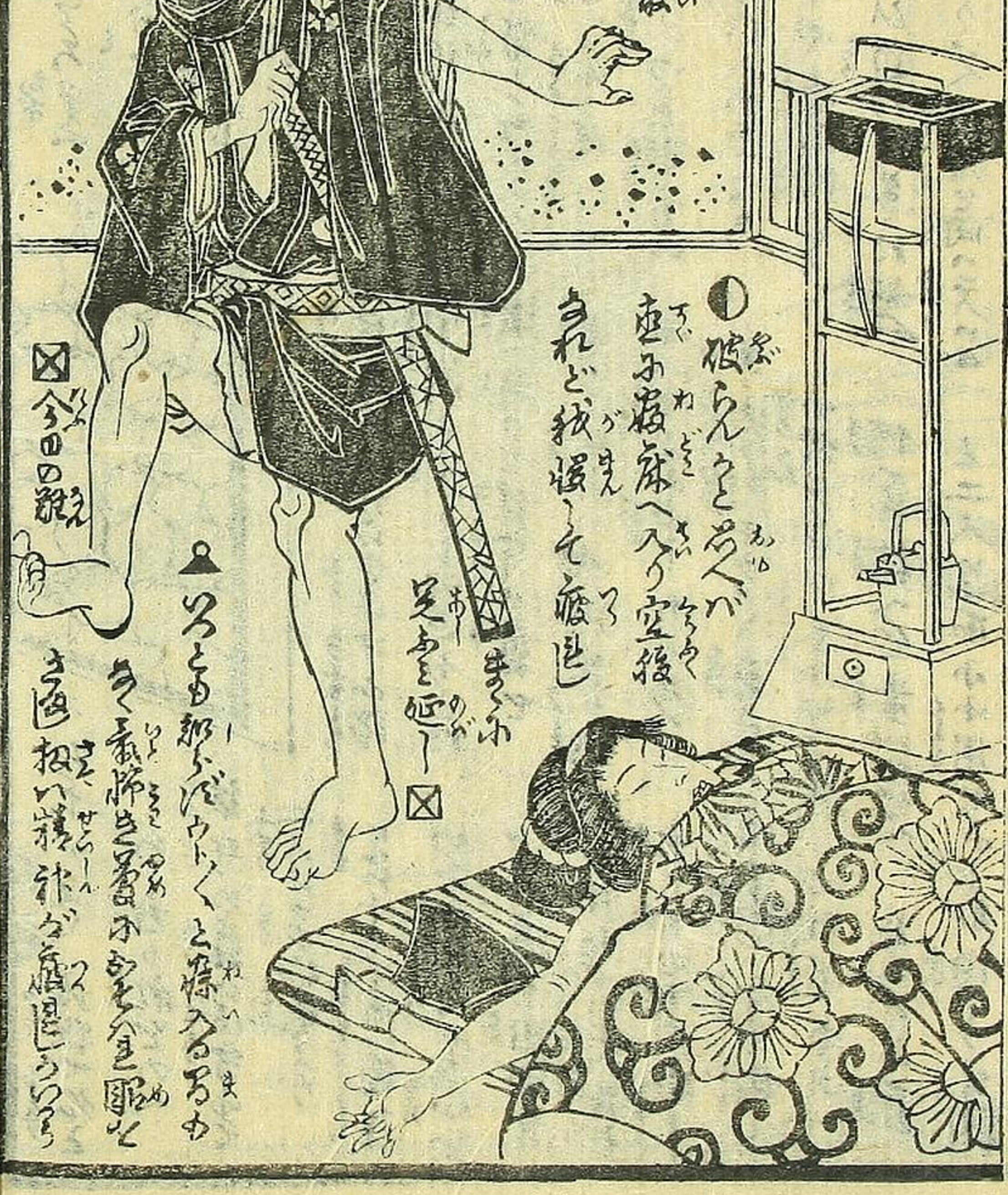


後と若かまが好日 盗行とるうとらの内を
 悲しく怖らまきまふ初め
 て出命がなすはてまへ
 とらげ
 とらげ
 縁先の窓戸の密と
 おとハト女でも使面へ初と
 初めのちどら思ひが後と
 ねがふ思懐と身引きて

夜専刃下

九

備切の
 姿の狂気へ
 まてなれば
 幾時より
 女も熟睡の候
 申す得ぬ
 起るも
 区殊水
 らの身
 白服
 ませ
 あれい
 い候やまて



破らんを思ふが
 座も寝床へ入り空後
 されど我強て候也
 足あを延一
 今口説
 今口説
 今口説

〇式械
 果トク
 何者
 係如
 何者
 や又幾
 何の
 小者
 小者
 御宿明治十二年二月三日
 深川富岡門前町十二番地
 編輯人岡本勸造



東京區分繪圖全 鹿兒島紀事 六冊 小切

命之養生善惡鏡全 獸類一覽かるた

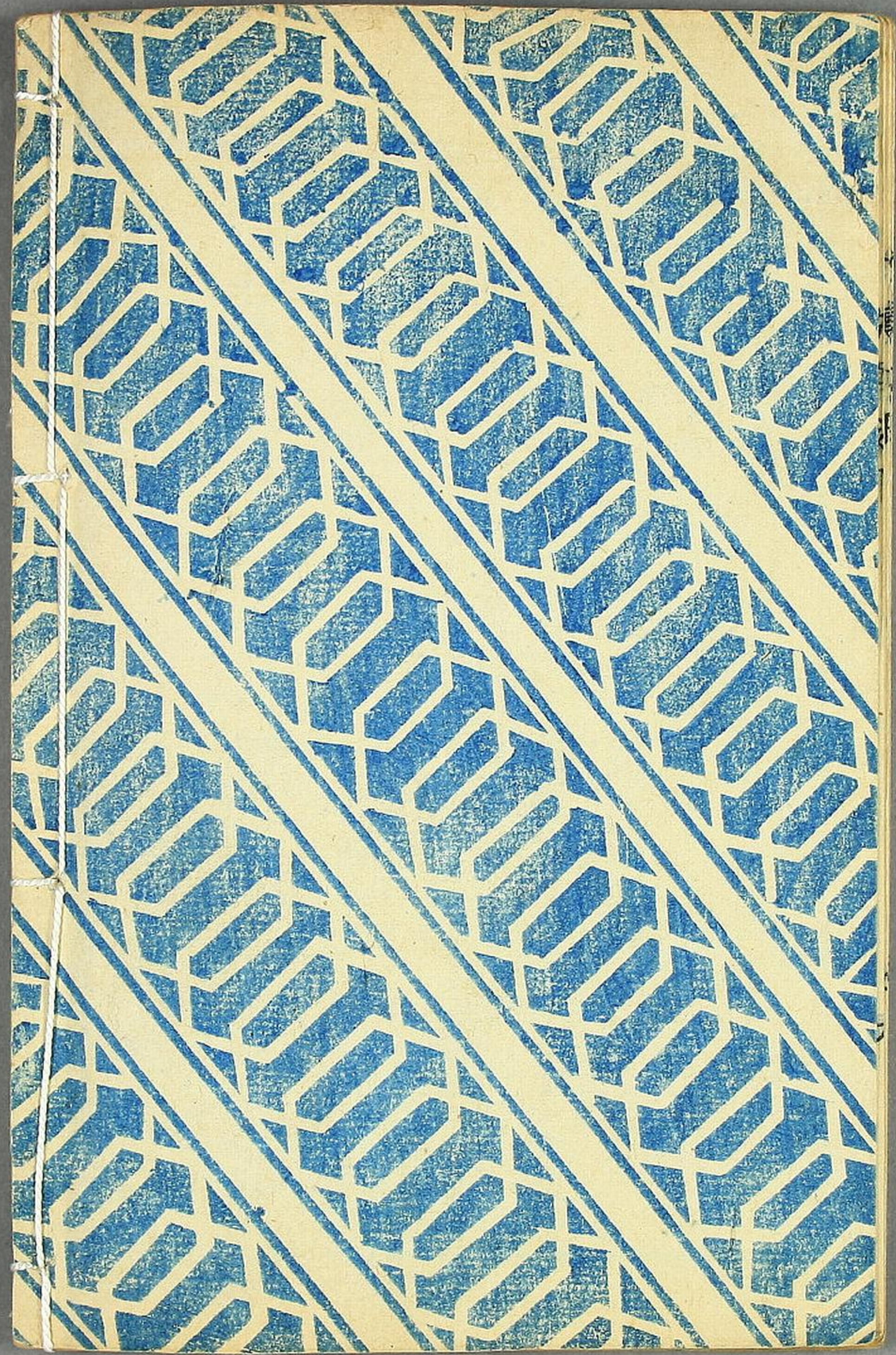
單語圖解全 彩色入小本數品

御所櫻梅松録 小齋 仇優忠臣藏折本

大功記銘々傳 四冊 新板双六類品々

龜地本問屋 編輯人 岡本勸造 出版人 綱島龜吉 浅草區瓦町十二番地

010190510692





其名も高橋
毒婦の小傳

東京

奇聞

芳川俊雄園

園本勸造綴

楊富貞種画

